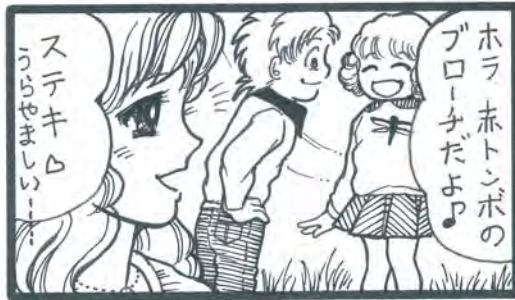


第37回 赤とんぼ

カコちめしん
ジョウくん
かほくがたナルドレン
ヒロ



分類学的にはトンボ科アカネ属の仲間ですが、一般的に胴体が赤く中くらいのサイズのトンボを総称して「赤とんぼ」と呼んでいます。代表的な種であるアキアカネをはじめとしてナツアカネ、ノシメトンボ、マユタテアカネなど、10種類以上のトンボがいます。秋になると水田に集まり産卵することから、赤とんぼが群舞する夕焼けは日本の秋の風景として童謡に歌われたりしています。

ところが最近、赤とんぼが姿を消すという現象が確認されるようになってきました。確かに以前は河北潟干拓地でも秋になるとうるさいほど赤とんぼが飛び回っていましたが、最近ではちらほら見かける程度になっています。

石川県立大学の上田哲行さんは、アキアカネが夏の間を過ごす高地での観察結果から、2000年頃から急速にアキアカネが減少しており、1900年代からみると100分の1以下になっていることを突き止めました。こうした急激な減少と90年代後半から普及してきたイネの育苗箱への農薬使用とが関係している可能性が考えられました。そこで、上田さんらのグループが、育苗箱の殺虫剤のアキアカネの幼虫への影響を調べたところ、フィプロニルという農薬を使った実験地では、アキアカネの羽化が全く確認されず、ネオニコチノイド系と呼ばれるジノテフランやイミダクロプリドという農薬では30%程度しか羽化しなかったという結果が得られました。

ネオニコチノイド系農薬は植物への浸透性と圃場への残留性があることを特徴としておりますが、フィプロニルという最近使われている農薬も同様の特性を持っています。

国立環境研究所の早阪大亮さんらは、これらの農薬についてトンボ類の幼虫への長期的に影響を与えることを指摘しています。これらの新しいタイプの農薬は、使いやすく効果が長持ちし、さらに安全性の高いものとして、かつての有機リン酸系の殺虫剤に変わって近年良く使われています。一方で、ミツバチへの深刻な影響や人の神経系への影響も指摘されており、学術的には論争になっています。ヨーロッパでは期間を限定してネオニコチノイド系農薬の使用を制限しています。一方、日本では一部の農産物で残留基準が緩められました。

赤とんぼが群舞する日本の秋の復活には、まだまだ困難がありそうですが、今、河北潟ではネオニコチノイド系を含む農薬の空中散布をおこなわない「生きもの元気米」の取り組みを進めています。必要のない農薬は使わないという選択が進み、農業にとっては益虫である赤とんぼがいる風景を大切にする水田が増えるように、皆様の応援をよろしくお願いいたします。（文：高橋 久）